

## 相対論的量子力学の数学的基礎

清水哲男 (Tetsuo Shimizu)

「基本ディラック対(fundamental Dirac pair)」を、「微分演算子: $\partial_x$ 」 とそれに双体する「『反』微分演算子: $d_x$ 」 の一対として定義する。それは既に「第一量子化条件: $[\partial_x, d_x]=1$ 」を充たしており、量子論的実体に対応している。基本ディラック対から構成される「対称交換子積: $S_x \triangleq \{\partial_x, d_x\}/2$ 」および「反対称交換子積: $A_x \triangleq [\partial_x, d_x]$ 」と、基本ディラック対の間には、

$$P_x \triangleq \begin{pmatrix} \partial_x \\ d_x \end{pmatrix}, S_x \odot_A P_x \triangleq \begin{pmatrix} [\partial_x, S_x] \\ [S_x, d_x] \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} [\partial_x^2/2, d_x] \\ [\partial_x, d_x^2/2] \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} \{A_x, \partial_x\} \\ \{A_x, d_x\} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \partial_x \\ d_x \end{pmatrix} = P_x,$$

が成立しており、 $S_x$  は $P_x$  に対して恒等演算子として作用している。基本ディラック対を基本ディラック対に変換する演算子を「ゲージ変換演算子(gauge transformation operator)」と呼ぶが、それは基本ディラック対から内部生成され、その一般形は、

$$G_x \triangleq S_x \cos \theta + {}^\lambda H_x \sin \theta, {}^\lambda H_x \triangleq \lambda(d_x^2/2) - (\partial_x^2/2)/\lambda,$$

であり、したがって、基本ディラック対の一般形は、

$$P_x(\theta) \triangleq P_x \cos \theta + {}^\lambda D_x \sin \theta, {}^\lambda D_x \triangleq {}^\lambda H_x \odot_A P_x,$$

で与えられる。このことから、基本ディラック対は、4つの象限: $P_x, D_x, -P_x, -{}^\lambda D_x$  をもっており、任意の基本ディラック対は、それらの量子論的重ね合わせとして表現できることがわかる。さらに「任意の2組の基本ディラック対: $P_x(\theta), P_x(\phi)$ の間には、

$G_x(\theta+\phi)$  が存在して、 $G_x(\theta+\phi) \odot_A P_x(\theta) = P_x(\phi), G_x(\theta+\phi) \odot_A P_x(\phi) = P_x(\theta)$ , が成立している」ことが証明できる。言い換えれば「任意のゲージ変換演算子においては、 $G_x(\theta)^2 = S_x$  が成立している」あるいは「 $P_x(\theta) \xleftarrow{G_x(\theta+\phi)} P_x(\phi)$ 」である。特

に興味深いのは、「 $P_x \xleftarrow{{}^\lambda H_x} {}^\lambda D_x$ 」の場合であり、基本ディラック対は、「空間(長さ)の量子状態: $P_x$ 」と、「運動の量子状態: ${}^\lambda D_x$ 」との間を往復運動しているのである。そ

れを「運動方程式(equation of motion)」で表現すると,

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\Delta}{\Delta\tau} P_x \triangleq {}^\lambda H_x \odot_A P_x \equiv \left( \begin{array}{c} [\partial_x, {}^\lambda H_x] \\ [{}^\lambda H_x, d_x] \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} [\partial_x, \lambda(d_x^2/2) - (\partial_x^2/2)/\lambda] \\ [\lambda(d_x^2/2) - (\partial_x^2/2)/\lambda, d_x] \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} \lambda d_x \\ -\partial_x/\lambda \end{array} \right) = {}^\lambda D_x, \\ \frac{\Delta}{\Delta\tau} {}^\lambda D_x \triangleq {}^\lambda H_x \odot_A {}^\lambda D_x \equiv \left( \begin{array}{c} [\lambda d_x, {}^\lambda H_x] \\ [{}^\lambda H_x, -\partial_x/\lambda] \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} \partial_x \\ d_x \end{array} \right) = P_x, \end{array} \right.$$

という 2 組の運動方程式が得られる。「対応原理:  $\partial_x = -p_x / (i\hbar), d_x = q_x, \lambda = m / (i\hbar)$ 」

を適用すれば, それぞれの運動方程式から,

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\Delta}{\Delta\tau} \left( \begin{array}{c} p_x \\ q_x \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} [p_x, (m(q_x^2/2) + (p_x^2/2)/m) / (i\hbar)] \\ [(m(q_x^2/2) + (p_x^2/2)/m) / (i\hbar), q_x] \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} -mq_x \\ p_x/m \end{array} \right), \\ \frac{\Delta}{\Delta\tau} \left( \begin{array}{c} p_x \\ q_x \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} [p_x, -(m(q_x^2/2) + (p_x^2/2)/m) / (i\hbar)] \\ [-(m(q_x^2/2) + (p_x^2/2)/m) / (i\hbar), q_x] \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} +mq_x \\ -p_x/m \end{array} \right), \end{array} \right.$$

が得られる. ここで,  ${}^m H_x \triangleq m(q_x^2/2) + (p_x^2/2)/m$  という見慣れた演算子, すなわ

ち「ハミルトン演算子(Hamiltonian)」を導入すれば, これらは,

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\Delta}{\Delta\tau} \left( \begin{array}{c} p_x \\ q_x \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} [p_x, {}^m H_x] \\ [{}^m H_x, q_x] \end{array} \right) / (i\hbar) = \left( \begin{array}{c} -mq_x \\ p_x/m \end{array} \right), \\ \frac{\Delta}{\Delta\tau} \left( \begin{array}{c} p_x \\ q_x \end{array} \right) = \left( \begin{array}{c} [p_x, -{}^m H_x] \\ [-{}^m H_x, q_x] \end{array} \right) / (i\hbar) = \left( \begin{array}{c} +mq_x \\ -p_x/m \end{array} \right) \end{array} \right.$$

というより簡潔な量子論的運動方程式に変形できる. 第一式においては, 「(長さの量) × (慣性質量:  $m$ )」に比例する「自己への『引力』」によって運動する「局所解(local solution)」が, 第二式においては, やはり「(長さの量) × (慣性質量)」に比例する「自己への『斥力』」によって運動する「局所解」が得られている. つまり, 第一式は, 自己への引力をもっているから「ボソン (boson)」として, 第二式は, 自己への斥力をもっているから「フェルミオン(fermion)」として, それぞれ解釈できる.

この意味するところは, きわめて重大である. 数学的意義としては, 『解析学 (微分積分学)』およびそれに基づく『公理的量子力学』の『完全性』が, ここに証明できたことになる. 物理学的意義としては, 「第一量子化条件『のみ』を公理とした『量子力学系』から, 『一般相対論的運動論』が演繹的に, 恒等式のみを用いて証明できた. あるいは, 「基本ディラック対とは, 『空間の量子』が, 『慣性質量』 = 『(自己)重力質量』つまり『等価原理』を充たす『引力/斥力』によって自由運動を行っている, その『局所解』である」ことが, 数学的にかつ厳密に, 証明できたのである.